地下鉄の友

Asato dans Le Métro
100 Essais écrits par Asato Izumi

泉 麻人

地下鉄の友
泉麻人
© Asato Izumi 1995

1995年1月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-185809-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

地下鉄の友

泉 麻人

講談社

地下鉄の友◉目次

地下鉄の視線　10
スポーツ新聞の罠　13
端っこの席　16
網棚活用法　19
改札口の勝負　22
不慮の便意　25
痴漢とレインコート　28
デカイ声の男　31
エスカレーター心理　34
駅売りのコーヒー牛乳　37
新幹線と缶ビール　40
至急の人々　43
闇引き運転　46
ある朝の無視　49

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

階段とスカート　52
ガイジンのガキども　55
靴下越しのスネ毛　58
シャカシャカ論争　61
おしゃべりな機械たち　64
チトフナの男　67
東海林さだおvs.泉麻人1　70
窓側と通路側　72
ああ、ハナキン　75
降ろしてもらえない奴　78
ホームのフォーム　81
ヨダレ繰り　84
想い出の丸ノ内線　87
眼の飛ばし合い　90
花粉症の女　93
イオカードのアリバイ　96
大阪の地下鉄　99
待ち合わせ　102
つりかわさん　105

ノザキのコンビーフ 108
おでき薬局の謎 111
バラキ中山 114
困ったクセ 117
切符の入れ場所 120
悪魔の自販機 123
月曜日のOL 126
スリのいた時代 129

東海林さだおvs.泉麻人2 132

マイクの達人 136
改札の魔術師 139
花見の場所取り 142
恐怖の新入社員軍団 145
携帯電話の人々 148
トンネル怪話 151
いい匂いのオジサン 154
神田駅地下街の絵師 157
街娼のいた駅前 160
不覚な鼻唄 163

座り読み、禁止 166
弱冷房車 169
駅弁の決断 172
困ったサービス 175
タクシーの逃亡者 178
仁丹を舐める男 181
インスタント写真 184
銭型模様の男 187
カラオケ列車は行く 190
赤鉛筆をはさむ人々 193
東海林さだおvs.泉麻人3 196
ビヤホールの季節 198
連休焼け 201
カレーのマナー 204
ツッパリ 207
スシ詰め心理 210
チョーゲロヤバ 213
ギャルがムレムレ 216
旧友 219

路線バス景色 222
テレフォンカード 225
日米車内摩擦 228
恐怖のダイビング電車 231
夜行列車 234
キュロット 237
懐かしの銀座線 240
愛の東上線 243
落石注意！ 246
お化け煙突 249
いつもの場所 252
ウダウダ 255
東海林さだおvs.泉麻人4 258
必殺仕切人 262
ワキ毛論争 265
〝キャベ中〟患者 268
オジサンとオジサマ 271
ループタイの季節 274
ビョンヤンの地下鉄 277

窓際のナルシスト 280
万一のとき…… 283
線路の上で…… 286
カラオケの見える町 289
三分間の「人生」 292
殴る蹴るの暴行 295
ナンパ 298
警戒危険区域 301
クリーニング・ロッカー 304
キヨスクの老眼鏡 307
個室 310
踏切 313
0990 316
終着駅 319
あとがき 322
特別対談 東海林さだおvs.泉麻人 解説にかえて 325
イラスト・蛭子能収

地下鉄の友

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

地下鉄の視線

地下鉄の座席にすわっている人を観察していると、大方次の三つの行動をとっている。

①雑誌、新聞、文庫本等を読んでいる

②車内吊り広告を見まわしている

③眠っている

単独の客は、ほとんどこのどれかのことをやっている。ごくあたり前の行為と言ってしまえばそれまでであるが、よく考えてみれば妙なもんである。むりやりやっている、ように思えてくる。

たかが四、五駅の時間にオレはそれほどこのスポーツ新聞を読みたかったのか。

「明菜の新恋人は商社マン」

「ショック！　赤ん坊を洗濯機に落とした馬鹿（バカ）っ母！」

女性週刊誌の中吊り広告の活字を何故そこまで真剣に眺めまわしているのか。

「ケント・ギルバート外語学院　四月生募集中」

別に語学も、ケント・ギルバートにも興味がないのに、繰り返し〝応募要項〟などをさっきから熟読している私……。

眠っている人間も、果たしてその何割が本当に眠いのだろうか、と疑問を感じることがある。多くは〝ウソ寝〟であろう。僕も新聞や文庫本等の用意を怠ってしまったとき、何度かウソ寝の手段を試みたことがある。眠くないのについつい目を瞑ってしまう。瞑っているうちに自らの演技にノッてきて、頭をコックリコックリやってみたり、降車のひと駅前あたりで「あれえ茅場町かぁ……」てな具合に寝惚け眼でホームを振り返ったり、小技

を使っていることがある。誰が見ているというわけではないのだが、ウソ寝はウソ寝なりに完成されたものでないと気分が悪い。

しかし、どうしてこんなことまでして地下鉄に乗らなくてはならないのだ。じっとりと向かいの席の客の顔を見つめてやればいいではないか、とも思う。が、やはり気まずい。街頭であれば、向こうからやってくる人の顔をチラリと見るくらい別に不自然ではない。それが電車、とりわけ窓越しに景色というものがひらけていない地下鉄の場合は、チラリほどの視線すら妙に罪悪感を伴うものとなる。

密室特有の心理、だ。エレベーターがその最たるものである。ドア上に備え付けられた各階表示パネル。五階、六階とランプが点いては消えするあの表示パネルを乗客たちは黙って目で追っている。そんなもん常時監視しなくとも、ある程度のことはわかる。しかし乗客は乗り込むや否や延々とそれを見上げている。すがるものはそこしかない、といった感じで。あの各階表示パネルをエレベーターから取りはずしたとき、唯一の逃げ場を失った乗客たちはいったいどのような行動体系をとるのか、NHKの科学ドキュメンタリーか何かで見てみたいものだ。

ところで、地下鉄から一切の車内吊り広告を取っ払い、文庫本、新聞等の車内持ち込み禁止、睡眠御法度の規制をした場合、乗客たちは向き合った各々の顔を睨みつけるようになるのか。それはそれでまた不気味である。

スポーツ新聞の罠

夕刊フジをヨイショするわけではないが、僕は駅売りのタブロイド紙やスポーツ紙を割と抵抗なく買えるタイプの人間である。人によっては、朝日か日経しか読まない。あるいは見栄張って英字新聞を車内で広げて、夕刊フジや東京スポーツなどの類いを読んでいる人間を蔑視する者もいる。まぁしかし、家ではともかく、公衆の面前でお硬い新聞を広げてみせるというのは、僕なんかはかえって恥ずかしい。飛行機のファーストクラスでふんぞり返って「お姉ちゃん、レミ（マルタン）」とかほざいてる成金オヤジの世界を彷彿する。気さくなパーティーにひとりだけタキシード着ていくような趣味はいただけない。

ところで、気さくな娯楽系の新聞を車内で広げていて恥ずかしくないか、と言われれば嘘である。恥ずかしい、場合もある。

不意に「別にそれほどまで読みたくもないのになぁ……」といった類いの記事が現れるこ

とがある。おそらく本紙の僕のコラムの脇っちょとか片面にドバっとあったりするのだろうが、０９９０で始まる〝24時間貴方をイカせます生録ＯＬアヘアヘ声〟等のセクシーテレフォンの広告、そして露骨な挿絵を伴ってのポルノ小説に風俗情報。

断っておくが、僕はその種のものは決して嫌いでない。ときに、それを目あてにタブロイド紙やスポーツ紙を購入することもある。だが、別にこの車内という場では読みたくないんだぜ。本当は一面の湾岸情勢の件が気になって買ったんだ、でもペラペラとめくっているうちにたまたまこが出てしまった、わかってくれよ。

というような言い訳を隣で横目をくれるどこかのＯＬサンに、前方に立ちはだかるセーラー服の女子高生に、告げたくなることがあ

る。

手慣れた人間になると、誤解をうけそうな面を指先で覚えていて、「湾岸情勢」から「巨人のキャンプ情報」へ、「霞ケ浦のヘラブナ釣りレポート」へと、やばい箇所を見事にすり抜けてゆく。しかし、安心はできない。一部スポーツ紙の場合、一面の裏っ側、つまり裏表紙の部分にドッカーンと〝オッパイわしづかみにされてもだえる裸女〟の写真などが載っかっていたりする。

こうなるともう逃げられない。「オレは本当は巨人が好きなだけなんだ！　単に元木の打撃調整が気になってこの新聞を買っただけなんだよぉ！」と、車内で絶叫してみても始まらない。向かい席のOLは、彼を単なる元木ファンのオヤジ、とは見てくれないであろう。

大方、車内で読んだスポーツ紙は降り際に網棚に載せてきてしまうものだが、先に書いたように隣のOLの視線が気になって存分に読めなかったエッチ記事に未練が残ることがある。で、こそっとカバンに忍ばせる。その瞬間がまたたまらなく恥ずかしい。ああ恥ずかしい、恥ずかしくていい……。なんかポルノ小説の主人公になってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor